

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一冊一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別頒布第三五二號
昭和二十九年八月二十五日印刷
昭和二十九年九月一日發行

第二十卷

九月號

淨

土



文

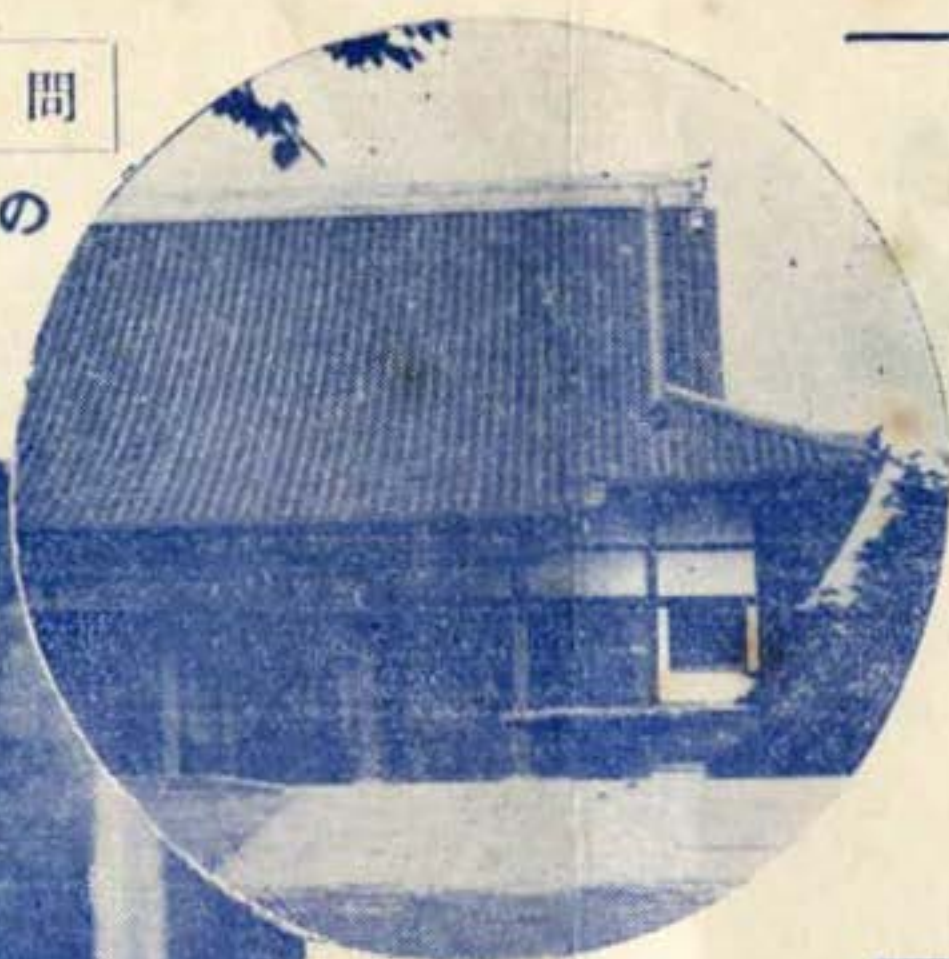
九月號

寫眞訪問

晨朝の
増上寺



(撮影オキタ)



曉闇未だ去らざる五時——其は雨の日も雪の日も正確に——、韻々として打鳴らされる巨鐘の音に一山の朝が始まる。巷はまだ僅かに一番電車の音がこうと門前を走りすぎる外は、靜かに眠つていゝ間もなくどこかの右翼團體か、新興宗教か、太鼓の音が響いてくる。

五時半、喚鐘の音とともに椎尾法主が、大野執事長以下列を正し、渡廊下を経て昇堂。勤行が終りに近づく頃、漸く朝日はほのぼのと本堂にみちて阿彌陀本尊の御顔も慈光をなげかけられる。

戦後最大の木造建物たる大殿は、旭光を正面に朝霧を拂つてそそり立つてゐる。江戸ッ子は、全都の組頭の木遣りを先頭に、この落成を祝つた。この後方約百米に舊大殿跡、更に後に、淨土宗務所がある。



浄土 九月號 目次

卷頭言……………(1)

秋の花を捧げて……………吉田絃二郎(2)

日本文學に現はれた
安樂世界……………中村考也(5)

宗教人ハイライト(1)
法將玄奘三藏……………眞野龍海(15)

創作 その夜の出家……………小林不二(27)

彼岸花……………安居香山(8)

物語 お竹如來……………戸松學瑛(19)

講話 一言芳談抄……………藤井實應(23)

みおやの子供……………佐藤良智詩(22)
松濤基曲



爽秋一新の候。巻頭言も今月から、場所を變え、内容も變えてお目見得することになった。

新聞には社説が、綜合雜誌には巻頭言が、それぞれあつて、編集者の意圖を即時代的に開陳するのが、この國の出版常識となつてゐる。本誌もまたそれにならつて、ここに一頁を費して、本誌が意圖する念佛信仰の社會的實踐という究極目的を、その月々の時評の装いをつけて、お目につけよというのが編集者からの注文である。

保安が自衛となり、破防法が、教育二法案が、アレヨアレヨという間に出來上り、あきれてゐるその眼前に、指揮權という大ダンピラがピカリと光かつたと思つたら、小菅から大小とりどりの亡者共が、ハクをつけて御歸還あらせられてしまつた。——後世、青史に残る昭和の怪談である。怪談はいい。お化けは別にかみつきもひつかきもしないから。然し、昭和のお化けはどうして仲々そんなにしとやかではない。自分達の足のないのを幸いとばかりに、國民大衆の向う脛を、デフレ棒でかつさらい、頭から「灰」をかぶせ、體中が黄色くなるまで叩きのめすのだから耐らない。

それでも、東洋君子國の人民は、永年陶冶されて來た無我と諦忍の美德を發揮

秋の草花をさゝげて

吉田 絃二郎



つくつくほふしが鳴く。秋が來

たのだ。と思ふだけでもまことに

うれしい。

いつの年もさうであるが秋を待

ち得たうれしさはまた格別で、生きてゐたことを、これ

ほどありがたいと思ふ季節はない。

とりわけ人間は老ゆるにつれて秋に生きるありがたさ

をしみじみと感じるやうになる。

西行法師は

わきて見む老木は花もあはれなり

今いくたびか春にあふべき

とうたつてゐるが、無常流轉のすがたは老木ばかりの

宿命ではない。老いたる人は今いくたびか春にあふべき

といふなげきを感じる。殊に秋になれば、今いくたびか

秋にあふべきの感慨が深い。

今いくたびの春秋を待つといふのは、あまりにも如露

の運命をわきまへぬ考へ方である。

だが人間は一面に於いては如露如電のすがたを見ながら、信じながらも、半面に於いては來年、來々年の秋を期待しつゝ生きてゐる。

この凡夫の生き方を何うすることもできない。いやこれでいゝのであらう。今この刹那に死ぬとしたら、恐らくかなしいことであらう。妻子ある人は妻子と別るゝさびしさに泣くであらう。それでいゝのだ。悟つても悟つても死ぬことはかなしい。

今日、この刹那に死ぬるかも知れない。しかしまだ數年生きるかも知れない。そしてこの二つのうち、どちらの死があたへられようとも、靜かにかなしみつゝ死んでゆくことができたなら凡夫の大往生といふことができやう。

秋海棠が咲いてゐる。

秋海棠を見れば今は故人になられた相馬御風さんを思ふ。糸魚川の相馬さんの家はあの近郷きつての佛師であつたといふことを聞いた。相馬さんの裏庭は畑になつてゐて、畑から直ぐ日本海に接してゐた。少し北風が強い日は潮吹が畑まで吹きつけられてくるのであつた。

わたくしはその畑に立つて日本海をながめながら語つたことがあつた。

しかもその畑は後になつて、かなしい思ひ出の地となつた。それから五六年後相馬さんはその畑のなかでたほれたまゝ亡くなられたといふ話を友人から聞いた。

新潟で良寛さまの遺墨展覽會を開くについて、係りの人が糸魚川に相馬さんを訪れて、良寛さまの遺墨を借りことにした。相馬さんは數時間かゝつて遺墨を集めて係りの人にわたしてやつた。

係りの人は糸魚川を立つてその足で高田市の某氏の家をたづねて、座敷に通されたばかりのところに相馬さんが死んだといふ電報を受け取つた。

相馬さんは係りの人に良寛さまの蒐集をわたして、玄關から引きかへして裏の畑に出た。相馬さんは來客につかれてゐたので畑に出て新鮮な海氣を呼吸したかつたのであらう。

相馬さんは、ふと、畑のなかに秋海棠が咲いてゐるのを見て

「秋海棠つてさびしい花だなあ！」と、しばらくながめてゐたが、そのまゝたほれてしまつた。

これが相馬御風さんの死について、友人が語つてくれた話である。まことに無常迅速の姿である。

芙蓉が咲き、萩が咲き桔梗が咲きはじめた。その花の一輪一輪に秋の幽韻をこめてゐる。

秋の花はとりわけてさとりなき凡夫の心を佛さまにむすびつけるために咲いてゐるやうに思はれる。

朝の露を帯びた桔梗をそのいとしい死兒の靈前に供へた刹那、死兒は母のふところにかえつてくるであらう。

朝の露にぬれた女郎花を亡き夫の佛前にそなへた刹那夫は妻の追憶によみかへつてくる。

ひとり生きのことは苦しい。しかし生きのこつて死兒のために、死んだ人たちのために秋の草花をさゝげることができるとを思へば生きることはいがたい。

桔梗が咲く。佛に秋の花を供へることによつてありがたい結縁にあづかることができるであらう。

秋の朝御佛にそなへられたたゞ一莖の秋の花には千萬の菩薩たちが、凡夫の貧しきさゝげものをよろこんでをられる感じがする。

日本文學に現れた安樂世界 (二)

文學博士 中 村 孝 也

三、地上の安樂世界

本月は「日本文學に現れた安樂世界」のお話の二回目です。そして今までの場合この岸から彼の岸、すなはち彼岸へ、穢れている娑婆世界から清淨な安樂世界へ生れ代ることによりまして、平和と幸福とを得ようとする信仰の文學をたづねてきたのですが、それは苦しみや悩みの多い生をすてて、安樂な死後の生活をこひねがふのでありますから、現實否定の文學であります。

それは一つの行きかたではありますけれど、現實の生命を否定するのではなく、それを今あるがままに肯定して生き

ておりながら安樂世界に入ることとはできないものでしょうか。言いかえれば私共の現實の地上の生活をそのまま安樂世界にしてしまふことはできないものでしょうか。それができるならば、それは私共にとつて大きな福音であります。そしてそれは心がけ次第でどうやらできそうなのであります。

その一つの例として、兼好法師けんこうの徒然草つれづれ草をひもどいて見ましよう。兼好はすべての現實を肯定し、そのなかから安心・安樂の境地を切り開いているからであります。

兼好は世間の人々が、無常悲哀の感じにとらはれる事柄に對しても、「仇し野の露消ゆることなく、鳥邊山とりべやまの煙立ち

彼

岸

花

安居香山

人間の此の世への執着は、彼の彼岸花の様に赤々としつこく、粘り強い。しかし、この執着の爲にこそ、人間は生き続け、そして愛と憎しみの錯綜する中で生命の限り戦ひ続ける。土手に葉もない眞すぐな莖を立て、群がり咲く異様な彼岸花は、こうした執念深い人間の精霊のまぼろしではなからうか。

○ 幼少の頃、墓参に行く途次、私はよくこの彼岸花を見た。

「死人花で、毒なんだよ」

と、母は幾度かたしなめた。毒と言はれるとどんな毒かなと思う好奇心に驅られるのが、こわいもの見たさの淺間しい人間根性である。そこで、或る日、人知れずそつと一本折り取つた事がある。青臭い莖の折目から、無花果を取つたとき出る様な乳液が、タラリタラリと落ちた。

「毒だ」

思わず固唾をのんだ私は、それを地の上に投げ出して、あたりにあつた泥水に手をつゝこんだ。私のこわかつた印象の一つである。

今にして思うのだが、あの焰の様な花と、牛乳の様な汁液は、人間の愛とにくしみの、死んでも絶えぬあらわれに違いないと。人生の織りなす綾が愛とにくしみである様に、この花は、人間の姿をとどめている。

○ 死人花。昔の人は、上手に名をつけたものである。

人間のいのちは限りなく粘り強い。瘦せ細つたあの骸骨の様な肉體が、どの様にして生きているのか私には分らない。最後の一瞬まで、骨と皮になつても、尙戦ひ続けるものである。

私の敬愛する先生の一人、大村桂巖先生が、死の病床にあえいで居られる。青い病棟の一室に、幾月かの腹痛に悩まされながらも、この

體は確かに生きてゐる。それは、不思議であり、驚異でさえある。刻々と迫り来る最後の一瞬へ、肉と心は生きようといのちに執着し、戦い続ける。こゝに根強い人間の姿をまざぐとみる。

腹痛を訴え、暑さを訴え、糞尿を訴えるこの肉體のうめきは、滅亡するものがあえぐ姿と言うよりは、何としても生き続けようとする生命への、あらん限りの戦いである。最早や、そこには、悲しみを越えて、驚異のみがある。

「先生、故郷の人々に會いたいでしょう」

同郷の先生に、何人もが覺える郷愁の水をさし向けると、

「あいたい、あいたい。よくなつたら、もう一度あいたい。」

最早や、思考も、言葉も幼兒の如くなつた先生にも、あいたいと言う欲望、そして、よくなつたらと言う再生への希望が、執拗に波を打つ。故郷の人々への無限の愛着、生き続けようとする生への執着、死への抵抗と憎しみ。様々な思惑が、この言葉となつて、咽喉の奥からしぼる様にはき出される。

「安居くん」

ただそれだけ言つてさしのべられた手をしつかり握る。何と温いことか。元氣に動いている人間の様なぬくもりが、血管を通して傳はる。なまじつかに生きてゐる人間の手よりも柔らかく生き／＼してゐる。

不思議な事だ。手と、足と、そして、口びるの肉だけは、たつぷり

ついている。食ふ所と、その食物を口に入れる手と、それを取りに行く足だけは

まだいのちはあるのだ。先生もまた、まだ斗かつている。この斗いに勝利を得させたい。

○
人生は流浪の旅路である。その人なりの生き方により、生き續け、そして戦ひ續ける旅路である。「放浪記」の女主人でさえ、彼女なりの生き方が、あゝした放浪をさせたのだ。しかし、思うにまかせぬのも又人生、その中で、愛と憎しみと戦ひ最後に至つても、誰人も能事終りなどと満足して死ぬことはあり得まい。この悔恨の強い人程、人生に執着し、旺盛な意欲を持つ人である。しかしながら、生ずる者は又滅する。榮えるものも又衰える。その間に織りなす愛と憎しみの繪卷きは、世界史の上に、メロドラマを掲げる。

且つて中國の大詩人白樂天は、二人の女性の爲に、哀歌をつくつた。

「此の恨みは綿々として盡くる期無し」

と結んだのは有名な長恨歌である。金殿・玉樓に華やかな半生を送つた一人の皇姬が、一度反亂の煙塵生ずるに及んで、馬前に死し、終に「君王も面を掩いて救い得ず、回り看れば血と涙と相い和りて流る」と言う悲劇となつた一駒の詩である。

他の一つは、たまたま潯陽江のほとりに來た客が、「水上に琵琶の聲」を聞いて、その主を求めたずねると、乙女の頃の花やかさから、結婚、零落への物語。思はず涙を掩うと言う琵琶行である。

いずこの人もこうした愛と憎しみの離合のリズムに生者必滅、榮枯盛衰の波を立てつ

中國の小話

神保侃司

簡単な言葉の中に、無限のユーモアと諷刺を折り込むことは、中國人の獨得な感覺である。佛教の本生譚や、譬喻經にも、そうしたものが往々にしてある。

こゝにかゝげた小笑は、世説新語にかゝげられたもの二三である。世説新語は、後漢の終りから、三國を経て、晉末に至るまで、即ち、二世紀の後半から、五世紀にかけての有名人の逸話を集めたものである。

これ等を讀んでみると、思はず苦笑したり大笑させられたりするものがある。そして、笑ひだけではすまされぬ諷刺が、その裏に含

まれている。いこひのひとときにも、仲々によいものである。

○
阮光祿は剡にいた時分、好い車をもつていた。それを借りに来るものには誰かれの別なく氣輕に貸してやつた。或人が母の葬式をしようとしてその車をかりたいと思つたが、遠慮して言い出さなかつた。阮はあとでそれを聞き歎いて言つた。「あゝ自分は車を持つていながら、人が借りたのを遠慮するくらいならいつそ車なんか持つていない方がましだ。」とついにそれを焚いてしまつた。

○
東晉の時代に、王猛という人が大志を抱きながら、空しく華山の北に世をさけて隱棲していた。たま／＼大臣で當時權勢ならぶものなかつた桓溫が、遠征の途すがらふと彼れのあばら屋を訪ねた。しかるに王猛は大臣の御入來なんか、どこ吹く風とばかりに、やぶれた衣服を着

余程の片意地と見えまして、よせばよいのに主人の睡むつてゐる間に下女にいいつけて、寢臺のまわり一面に錢をぶらさげた。こうしておけば、いくら錢嫌いな亭主でも目がさめたとたんに思わず「アッ、ゼニが」というだろうと考えた。しかしこの計畫は見事に失敗した。朝になつて目をさました王大人いつものように落ちつきはらつて女中を呼び、「こんなものはやく片附けておしまい」といつたとか。その時代「こんなもの」というものを「阿堵物」といつたが。それがいつのまにか錢の代名詞になつた。

○ 劉伶はいつも酒ばかり飲んで放達であつたが、或る時衣服を脱いで裸のまま、屋内にいた人がそれを見て譏つた。伶は平然として「俺は天地を住居としてゐるから、家は猿又みないなものだ。君等はなんで俺の猿又の中に入つてゐるのかね。」

○ 阮咸は姑の家の異人の女中をかあいがつて

いた。そのうち阮咸が母の喪に服してゐるうちに、姑は遠くへ引つ越すことになつた。さうして大變と思つたが女中は残しておくとのことホツとしていた。ところがいざ出發となるとまさかと思ひきや連れて行つてしまつた。阮咸は急ぎ宿場の驢馬を借り、喪服をつけたまま追つかけて行き、女中を連れもどしていわく。「人間の種をなくしちゃ困るからな。」それがすなわち阮孚の母親である。それから妾のことを人種というようになつた。

○ 王戎が七つの頃の話したが、近所の子供と遊んでゐると道傍にすももが枝もたわわになつてゐたのをみつけた。他の子供達は

口うるさい朋輩の世間話しに耳も貸さず、お竹は、國元出立の時守本尊として持参した出羽の三山、月山、羽黒山、湯殿山のお守りを大事に、之を臺所の棚の片隅に奉安し、暇さえあれば合掌し念佛し

手と足はいそがしけれどナムアマミダ佛

口と心のひまにまかせて

赤いたすきで前垂れがけ、働くこと、念佛申すことが日課であつたのでしよう。同じ臺所の下男權助、からかい半分の茶目氣分から、お竹の念持佛を鯛の頭と取り替えて、之を拜がませようと柱のかげで見て居ると不思議や鯛の頭からコウコウと光明がさした。アツと權助はビツクリ仰天して懺悔し後には一かどの念佛行者となつたと言ふ。知らぬが佛、鯛の頭も信心からと今に傳えて面白い。

○

信心深いお竹、人格の光りもさること乍ら、當時お竹使用の流し板から夜な夜な光明が出る、後光がさすと家人も主人も之を拜んだと忽ち江戸中の評判となり、門前市をなす騒ぎ、當時名高い浮繪の面々は錦繪に筆を振り百美人の随一とし、はては鍋、釜、ざる、みそこし、すり鉢、ちり蓮華まで取り込んでいやが上にも後光を高調し、又當代の名優、田之助、梅幸はお家の藝として舞臺に上演し、お竹大日如來としてはやし立てました。

いつしかこの事が江戸城の奥に聞こえ、五代將軍の御母、從一位

桂昌院の御耳に入りその行狀を感嘆の餘りお竹使用の流し板一片を宮と富久佐

お彼岸

「おひがん」と聞くと、暑さ寒さも彼岸までの言葉どおり、厳しい暑さ激しい寒さから解放されて、何かなじにはつとする感じがいたします。家々ではぼたもちやおはぎが作られ、佛壇に供え又お墓へ参つたりお寺からは法要のしらせや、お説教の案内が配られてくる。ふだん、とかく世間の忙しい仕事にまぎれがちの佛事とか、我家の祖先、自分の修養などを反省させられる時節です。

もう今ではすっかり我國の國民的行事として親しまれている彼岸は、もともとその昔聖德太子から初つていると傳えられます。人々は眞西に日の入る彼岸の中日に、太子の創建という大阪の四天王寺の西門——そのころは難波の岸近い——に詣つて目もはるか波の背を赤くそめて沈む日輪をば拜んで、西の方、我等が理想と仰ぐ世界、浄土への深い想いをよせたのでした。それは、中國で浄土の教をおひろめになつた善導大師が、觀無量壽經の中の日想觀（日に想をよせて浄土を心に浮べる方法）の解釋の中で「春秋二季、日の正東から出て眞西に沈む時にする。眞西が彌陀の佛國だから」と言つておられるのによることでもあります。

（本會發行、浄土シリーズお彼岸より。シリーズはB6四頁、二圓、三百以上一、五圓、五十部毎八圓）

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

